

2024年6月2日 No. 3722

先週の講壇から

“弱さが必要！”

コリントの信徒への手紙 第12章 12節～26節

聖句「頭が足に向かって『お前たちは要らない』とも言えません。それどころか、体の中でほかよりも弱く見える部分が、かえって必要なのです。」(12:22)

1. 《這い上がる》 イングランドの名門サッカーチーム「マンチェスターユナイテッド」は、1958年、全欧制覇を目前に控えながら、飛行機事故でレギュラー選手の殆どを失う大惨事に見舞われます。しかし生き残ったチャールトンは、ボールを蹴ることさえ出来ない状態からWカップの最優秀選手に選ばれるまでに成長します。サッカー界では、彼を「地獄から這い上がって来た男」と賞賛しました。ドン底の地獄を味わい、弱さを知っている者が最も強いのです。
2. 《弱さに直面》 イングランドには「サッカーは少年を男にし、男を紳士に育てる」という諺があります。サッカーは「格闘技」ですから、感情的になり反則や乱暴なプレーをしてしまいそうになります。自己抑制の出来る胆力が求められるのです。技能だけではなく、チームメイトを慰め励ます心、最後まで諦めない闘志、希望を失わない精神力があってこそなのです。教会生活と似ていると思います。子どもは飽きると投げ出し、青二才は持続力がありません。チャールトンも「先輩たちがいてくれたら…」と思っていたのですが、やがて「自分が彼らの代わりをすればよいのだ」と悟ってプレーする内に、単なるウイングプレイヤー（サポート役）からオールラウンドプレイヤーへと成長して行っただけです。
3. 《摂理を知る》パウロは「弱く見える部分こそが、却って必要なのだ！」と言います。「弱い人が混じっていても、足を引っ張らない限り、いてくれても構わない」の意味ではありません。「弱く見える部分」が絶対に必要なのです。沖縄に棲息する白帯揚羽は黒い羽に白い帯のような模様が入っています。ところが、メスの中に赤い斑点の混じった固体が時折り見つかります。オスからは好ましくないのです。ところが、天敵の鳥が有毒の紅紋揚羽と区別がつかず、赤い斑点の蝶を食べないのです。こうして絶滅の寸前に、赤い斑点のメスが種の存続を守ったのです。彼女は希望の星だったのです。画一的に優劣を決めようとする私たちですが、多様性を認めない社会は直ちに滅びるのです。神さまがあなたをここへ導かれたことは、私たち皆にとって、何か深い意味と使命があるのです。

朝日研一朗牧師